

この連載の第一回の写真の個所で紹介した、元禄十(二六九七)年に中世以前の創建であることを濱田藩に報告している四ヶ寺のうち、唯一現存していないのが真言宗勝達寺です。

勝達寺は、染羽天石勝神社の別当寺として、同社左手後方の高台にあったとされます。別当寺とは、神社を管理するために置かれた寺のことです。

なぜ神社の管理を寺がしていたのでしょうか。中世では、神道の神様を仏教の仏様が権に現した姿(権現)と考え、神道と仏教を一体的にとらえる神仏習合という考え方が一般的であり、神社と寺院が近い関係にあったためです。染羽天石勝神社も当時は瀧蔵権現と呼ばれていました。

勝達寺は承平元(九三二)年に京都から浄蔵大徳が来て創建したと伝わり、全盛期には十六坊の末寺を構えたといひ、櫛代賀姫神社(当時は、境内にあった浜八幡の名称で呼ばれることが多かった)の別当寺真如坊も勝達寺の末寺であったといひます。

注目されることとして、勝達寺は文明三(一四七一)年に益田氏の

代官として周防国吉敷郡恒富(山口市黒川)の支配を担当しています。勝達寺がかなりの組織を持っていたことを示しています。

このように栄えていた勝達寺がなぜ現存していないのでしょうか。それは明治初年の廃仏毀釈によるものです。明治新政府には神道を国教化しようとする動きがあり、そのために神道から外来の仏教を分離させようとなりました。甚だしい場合には、仏教を排斥する運動となりました。これにより勝達寺のような別当寺は長く一体であった神社から分離され、経営基盤を失ひ、廃絶した寺院も少なくありません。廃仏毀釈は日本の、そして益田の宗教文化に大きな影響を与えたのでした。



鎌倉の極楽寺の木造不動明王坐像もとは勝達寺の仏像でしたが、大正五(一九一六)年に移されました。